1年間の研究・探究活動の集大成

高高×高女合同発表会開催

3月12日に高崎アリーナで、「高崎高校×高崎女子高校課題研究合同発表会」（以下、合同発表会）が開催された。今年度は、午前の部から高崎高校（以下、高高）と高崎女子高校（以下、高女）が交流する形で開催された。今回は、合同発表会に参加した両校の生徒と運営を担当した先生方に話を聞いた。

今回の合同発表会に参加した高高生と高女生にインタビューを行なった。

高高生からは、「午前の部に行なわれた竹田和広氏と高橋史好氏のトークセッションを参考に合同発表会に臨んだ。最初は、高女生と話すことに緊張していたが、会話を続けていくうちに積極的に発言することができた。高高の中だけで行なわれていた発表会では得ることができなかった質問や意見が、合同発表会を通して高女生から聞けたことは、貴重な経験だった。他人の意見を注意深く聞くことは、合同発表会だけではなく、日頃の学校生活や社会人になっても大切なことだと思う」という声が上がった。

また、高女生からは、「高高生は、想像力豊かな生徒が多いという印象を持った。質問や意見は鋭いものが多く、今後の探究活動において参考になることが多かった。さらに、高高生の発表は、数値やグラフの根拠を明確に示していたため、納得しやすい発表だった。来年も開催されるのであれば、積極的に参加したい」という意見があった。

当日の研究発表の様子

続いて、今回の合同発表会で企画と運営を担当した高高のSSH部部長である岡田直之先生と、高女の探究部部長である中村嘉宏先生に話を伺った。

岡田先生は、合同発表会における対話スキルの重要性について、「ゲストによるトークセッションは、『よりよく学び合う』ことを目的としていた。単なる『会話』だけではなく、どのような質問や意見をするのかを考えながら『対話』することが、これからの社会では必要だと思う。一人ひとりの対話スキルが向上することは、全体の創造性や思考力の向上につながるため、今後の学校生活でも意識してほしい」と話した。また、「高高が今まで行なってきた発表会は、批判的に物事を考える『クリティカル・シンキング』を大切にしていた。合同発表会は、高女生との『対話』による発表で、まだ見ぬ視野を広げる良い機会だったと思う」と語った。最後に、「高高生には、自分はこういう人間であるという『自分軸』を大切にしてほしい。色々な生徒と関わって、改めて自分の性格や考え方に気付いたと思う。これを基にさらに『自分軸』を強くしてほしい」と述べた。

中村先生は、合同発表会の目的について、「異性、他校との交流を通して、同じ学校の生徒からは得ることができない視点について、互いにフィードバックを行なうためだ」と話した。また、「高女生が行なっていた個人探究は、自身の一方的な視点からしか物事を見ることができない。そこで、高高生からのフィードバックを参考にして、さらにより良い個人探究になるように願っている。合同発表会で教員は、生徒の活動の一部分しか見ることができなかったが、参加した生徒が少しでも成長することができたならば、有意義な時間だったと思う」と振り返った。

（木村・福田）

完全英語の実践的な授業行なう

チェコの狂言師と交流

授業での狂言体験

2月18日に、1年7組で英語の教科書内に登場したチェコの狂言師であるオンジェイ・ヒーブル氏との交流授業が行なわれた。授業はチェコにいるオンジェイ氏とオンラインで映像を繋ぐ形で実現し、オンジェイ氏による狂言紹介や質疑応答、さらには狂言の体験を行なった。

今回の授業を企画した長谷川太一先生に話を聞くと、「高高に赴任してから、ずっと授業を通じて高高生を海外と繋げたいと考えていた。毎日英語を勉強しているにもかかわらず、実際に外国人と英語を活用して会話する機会がないのは非常にもったいないことだ。オンジェイ氏を取り上げたレッスンを教科書で見たときに、何かできることはないかと考え、SNSでメッセージを送った。打ち合わせの際にオンジェイ氏の人柄の良さを感じ、ぜひ高高生と繋げたいと強く思った」と経緯を語った。

また、授業後の感想として、「やってよかった。英語学習についてもアドバイスをもらえたこともよかったが、何よりも海外の人と繋がることができたことは、私にとっても大きな一歩になった。今後の授業でも海外の人と繋がっていきたいと思った。その中で、生徒には授業で行なっているディスカッションやディベートにより多くの外国人と挑戦してみてほしい」と話した。

（福田）

新入部員大募集！

新聞部

新聞部は3年生5人、2年生1人で、顧問の北爪先生、副顧問の大隅先生のもと活動している。現在までに、一般的な新聞と同じサイズであるブランケット判は通算307号、B4サイズのミニプレスは通算188号が発行された。昨年の第38回群馬県高校新聞コンクールでは、2年連続で最高賞である知事賞を受賞した。

実際の取材の様子

基本的に、平日の放課後、理科棟1階にある新聞部室で活動している。主な活動内容としては、興味を持った人や事柄に対して取材、調査を行ない、約1カ月に1度のペースで新聞を発行している。特に、6月に発行する翠巒祭号は、ブランケット判を10面程度制作する、最も手の込んだ新聞となっている。

取材について、ミニプレスでは主に校内や県内の事に関して取り上げ、ブランケット判では県内だけでなく県外に赴くこともある。過去には、元総理大臣の孫である中曽根康隆さんや、作中で高崎高校をモチーフとした校舎が登場するアニメ「菜なれ花なれ」のプロデューサーである菅野勇人さんに取材を行なった。新聞制作において、様々な人に取材したり、記事を書いたりすることでコミュニケーション能力や文章力が養われる。また、記事のネタを出すためには、周囲の出来事や話題に敏感になる必要がある。そのため、身近な情報収集能力が身につくことも、魅力の一つだろう。

高高には、中学校にはなかっただろう文化部が多いため、見学だけでもしてみるべきだ。その中で、新聞部に興味を持った時は、ぜひ入部してほしい。

（荻野）